14　21世紀において予測される家庭像と，それに影響を与えると考えられる諸要因についての研究

東京大学医学部産婦人科
水野正彦・佐藤孝道
杉本充弘

Ⅰ　はじめに

日本社会は，あと20年足らずで21世紀を迎える。この新しい世紀がどんな時代になるのかは，われわれすべてにとって重大な関心事である。戦後30年の間に起こった人口動態の激変は，日本社会独特な世代構成を斉したが，21世紀にはその延長として逆ピラミッド型の人口構成が出現し，巨大な老年人口と比較的に少ない青壮年人口という困難な問題に直面することになる。これは，終戦後のほぼ10年間継続したベビー・ブームが，その後沈静して少産少死型の人口動態に移行したために生ずる現象であるが，これが21世紀の日本社会に与える影響は，まことに大きいものと考えられる。

核家族化の進行も，今後の大きな問題である。地域連帯感が稀薄化した社会の中で，核家族化した家族が生活を送るということの影響は，人々の上に色々な形で蔭を落すに相違ない。

「世代間の断絶」ということが言われ始めて既に幾多の年月を重ねているが，この断絶は今後ますます拡大する傾向にある。老令化・核家族化あるいはその他様々な変化に対応しながら，世代間の断絶を出来るだけ狭めて行くにはどうしたらよいか，それを考え，回答を出し，回答を実行していくことが，20世紀から21世紀へのバトン・ターチをスムースにする道である。

以上のようなことから，われわれは，戦後30年間におきた様々な社会的事業とそれが家庭生活に与えて来た影響を分析し，この分析を基礎として21世紀の家庭像へアプローチすることにした。

Ⅱ　調査方法ならびに調査項目

総理府・厚生省・労働省などの政府関係刊行物，各種新聞による調査，NHKによる調査，あるいは民間諸団体による調査を主な資料として，以下の各項目を調べた。

1）人口に関係した問題

年令別構成比，世代別人口構成，年少・青少年人口の推移，移動人口，婚姻関係・市部人口割合の推移，出生率の推移，児童・生徒数の推移，平均寿命，合計特殊出生率の推移など。

2）生活環境・生活意識に関する問題

高学歴者比率の推移，学歴社会の傾向，教育程度ならびに教育費，市民意識，生活目標，自分と世の中，国と個人観，地域社会とのかかわり方，隣り近所とのつき合い方，公共事業への協力姿勢，プライバシーに対する態度，社会の中での個人の責任，新入社員の意識，家庭観，主要な家庭機能，一番大切なもの，子育てに対する態度など

3）家庭関係・家庭構造に関する問題

核家族・小家族化の動向，家族計画についての意見，世帯構成，世帯数・世帯人員，母子・父子世帯，離婚，親戚とのつき合い方など。

4）婦人の変化に関する問題

生活時間，自由時間の過ごし方，余暇時間，婦人労働力の推移，主婦労働の一般化，男女別雇用者増加率の国際比較，家計に占める妻の収入，婦人の学歴，進学率，家庭経営事項の決定，女性の結婚観，男女交際，婚姻率，夫の家事・育児，女性のライフサイクル変化など。

5）生活内容に関する問題

成長商品・成長マーケット，経済成長率の国際比較，国内総生産の国際比較，耐久消費財の普及度，住宅水準，居住環境，生活不安意識，思わぬ収入があった時の消費意識，家計消費支出，今後充実させたい生活側面，食事メニューの変化など。

6）教育・福祉に関する問題

教育費，社会・教育・文化施設数，造ってもらいたい余暇施設，造ってもらいたい文化教養施設，情報関連機器の教育の場での利用，社会保障（年金など），児童福祉関連予算，スウェーデンの社会保障費推移，児童家庭費，児童福祉施設数，児童福祉施設在所者数，認可保育所入所児童数，保育所措置費

伸び率，保育所収容率など。

7) 子供に関する問題

自由時間の過ごし方，普段の遊び，子供の生活時間配分，児童の睡眠時間，子供の遊び場所，外遊び，家遊びと外遊びの比較，勉強時間の学年推移，1カ月の平均読書量，将来の暮し方の希望，'60年代と'70年代の若者の違い，子供の食事内容，社会コミュニケーション（周囲との関わり），少年の父母欠損率，子供から見た親のしつけ，子供から見た親子・夫婦関係，父や母と一所にする行動，父母と話した時間，テレビ視聴，テレビ視聴時間，マンガ，児童の体格・体型の変化，公害の子供への影響，子供の疾病・異常，子供の事故，エッチなことへの想い，性欲望自覚，第二次性徴発現累積率，性の情報源，子供の非行関係，不良行為の体験，母親の就労と非行，非行少年の補導人員数など。

Ⅲ 成績ならびに考察

以上の調査資料を，1)子供をとりまく環境，2)それの子供への影響（インパクト），3) コメントとしてまとめた。

A．家庭・社会関係

1) 子供をとりまく環境として，夫婦中心の家庭観，主婦就労者の増加，義務的な養育観，コミュニティーの崩壊，個人主義的意識の高まり，伝統的な「家」意識の減少，核家族化などの傾向が進行しつつあり。

2) それの子供へのインパクトとして，スキンシップの減少，とまどい，社会性の欠如，自閉的個人生活型の増加など，子供にとって好ましくない傾向が目立って来た。

3) したがって，その対策が必要であり，両親の自由時間の見直し，祖父母の役割の見直し，親族関係の見直しなどを通じて，新しい家庭観を育成することが望まれる。また，社会全体としても子供に対する関心を高めることが必要で，集団訓練の機会や場所の設定，育児教育の見直しなどが望まれる。

B．経済・社会関係

1) 経済成長の鈍化，人口構成の高令化の促進，子供数の減少などが，子供を取り巻く環境として固定して来る。

2）その子供へのインパクトとして，子供自身の将来展望を暗いものとし，ある種の被害者意識を醸成したり“しらけ感情”にはしらせることになる。国家・社会観もそれと平行して稀薄化してくる惧れがある。

3) したがって，現在から老令年金や児童手当などの福祉制度を見直して，将来への対策を立てておく必要があり，また，人間教育の面でも“社会的視野”を育成するような努力が必要になる。

C．健康に関する問題

1) 社会的には，公害・環境破壊などが進行するし，家庭生活面では，受験勉強・テレビ・夜型生活など不健康な生活様式が強いられるし，また食生活の面では，インスタント食品や見栄え志向の献立てなどが普及して来ている。

2) 以上の結果として，公害病，栄養の片寄り，体力の減少，精神不安定など子供の健康障害が生じて来ている。

3) したがって，環境整備，教育・特に受験本位の教育の見直し，バランス栄養学の普及など種々の対策が望まれる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1 はじめに

日本社会は,あと 20 年足らずで 21 世紀を迎える。この新しい世紀がどんな時代になるのかは,われわれすべてにとって重大な関心事である。戦後 30 年の間に起こった人口動態の激変は,日本社会独特な世代構成を斉したが,21 世紀にはその延長として逆ピラミッド型の人口構成が出現し,巨大な老年人口と比較的に少ない青壮年人口という困難な問題に直面することになる。これは,終戦後のほぼ 10 年間継続したベビー・ブームが,その後沈静して少産少死型の人口動態に移行したために生ずる現象であるが,これが 21 世紀の日本社会に与える影響は,まことに大きいものと考えられる。核家族化の進行も,今後の大きな問題である。地域連帯感が稀薄化した社会の中で,核家族化した家族が生活を送るということの影響は,人々の上に色々な形で蔭を落すに相違ない。

「世代間の断絶」ということが言われ始めて既に幾多の年月を重ねているが,この断絶は今後ますます拡大する傾向にある。老令化・核家族化あるいはその他様々な変化に対応しながら,世代間の断絶を出来るだけ狭めて行くにはどうしたらよいか,それを考え,回答を出し,回答を実行していくことが,20 世紀から 21 世紀へのバトン・ターチをスムースにする道である。

以上のようなことから,われわれは,戦後 30 年間におきた様々な社会的事業とそれが家庭生活に与えて来た影響を分析し,この分析を基礎として 21 世紀の家庭像へアブローチすることにした。